

# カトリック 仙台教区報

2002年 4月 20日 No.145

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任者 本部事務局

広報担当 田中丈夫

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

## ラザロの復活

仙台教区 司教 溝部 脩

ヨハネ十一章のラザロの復活の場面を讀むと、不思議なことばに出会います。あれ程愛していたラザロが病氣だと聞いても、イエスは彼の家庭を訪れません。死んだと聞いても、「わたしはそこに居合わせなかったのは良かった(15)」と答えています。ラザロとその姉妹マルタとマリヤは、イエスにとって最高の友でした。生前幾度となくイエスは彼らの家庭を訪れ、楽しい会話を弾ませ、

飲み食いもしていた筈です。それでもイエスは彼らにとって一番大切な人生の時に訪れません。一体なぜなのでしょう。これが分かるためには一つのことばが同じ十一章に載せられています。「この病氣で死ぬことはない。それは神の栄光のためである。神の子はそれによって栄光を受けるであろう」(4)。



「わたしは病氣だから、神様はすぐにそれを治してください。って当然」と考えているのです。私達は病氣だから、私たちの必要にすぐに答えて下さらない神様は無用の長物なのです。答えてくれないと、「無慈悲な神」「こんなものはいらない」と呟くのです。要するに私たちが神であり、神様は単なる私たちの必要に答える召し使いに過ぎないのです。

病氣だからといってすぐに駆けつけることをしません。それは病氣を通して、死を通して、人が神の考えをしつかりと理解するためな

私たちの人生にとってイエスは決して召し使いではなく、かけがえない私たちの「主」であることを思い出させているのです。「わたしは復活であり、いのちである」(25)のです。わたしたちは主の手の中にあり、主の思し召しに従って生きるのです。復活とは、聖父なる神の思し召しに應えて生き、死んだイエス

に学んで生きることをさしています。毎日の生活の中で、わたしたちに何を神様がお望みになるのかを問いかけてみるのが大切です。復活節の間、私たちが「あなたがわたしに何を望みなのですか」という問いかけを

したいものです。

### 残滴

▼復活祭が過ぎ司祭異動も一段落して、教区は決意を新たに福音宣教を再開する。これは教区や小

「残滴」(ざんてき)  
残りのしずく、紙面の付け足し、の意味。  
今回から、佐藤守也神父の『心の泉』に変わり、三浦平三神父の『残滴』が掲載されます。

教区教会などの組織が主となるが、現実には信徒や修道者、聖職者の個人的な意欲に支えられている。▼つまり信者各自がどれほど福音宣教を理解し、意識を持っているかということ。云うまでもないが福音宣教を抜きに教会は存在しないし、それはすべての信者に与えられた使命である。今日はそのうち福音宣教の意欲を生む、私たちの信仰意識について考えてみよう。▼洗礼を受けてカトリック信者となった事実をどのように受け止めているのだろうか。幼児洗礼でも成人洗礼でも、信者となったことを喜びと感じ誇りに思っているのだろうか。▼他人がそれを判断するのは難しいが、自分で確かめることは出来る。例えば信仰行為や教会共同体のため、どれほど恣意(自分勝手な気持ち)を抑えられるかなど。隣人愛のことは云うまでもない。▼要するに自分の信仰に喜びや誇りを感じないなら、福音宣教への意欲など湧く筈もない。ただ信仰意識は自分の心が次第で、成長もするし成熟させることも出来るものである。(平)

# 司牧評議会の新たな出発

去る三月二十一日(木)カトリック仙台司教区センターにおいて、司牧評議会定例会議が開催された。司牧評議会は一九九八年六月佐藤千敬司教の引退とともに解散されたが、溝部脩司教着座後約一年半を経て、その活動が新たな出発を迎えることになった。

今回溝部司教によつて召集された司牧評議会定例会には、司教はじめ各県司祭代表・各県信徒代表・修女連代表など十六名が出席し、仙台教区の今後の宣教・司牧の歩みについて議論を深めた。議案となつていた「カトリック仙台司教区司牧評議会規則」の改定及び「各県の当面の課題(仙台教区の活性化に向けて)」については、各県連絡協議会での論議を踏まえて討議が交わされ、青少年育成・ホームページを活用した宣教態勢等の課題が提示された。また、司教館建設委員会の動きについての報告もなされ、司教

館建設の必要性に関して各県評議員の理解が深められた。なお、詳細は「第一回司牧評議会定例会議報告」として近日中に各小教区・修道院に配布される予定。

## 仙台キリシタン殉教祭

今年も仙台教区の仙塩地区八教会主催による「仙台キリシタン殉教祭」が二月二十四日(日)午後一時から、広瀬川河畔の青葉区西公園内「キリシタン殉教碑」前広場におよそ二〇〇名が参加して行われた。



一六二四年二月、仙台城下を流れる凍りつくような広瀬川でポルトガル人宣教師ディエゴ・カルヴァリオ神父と八人の信徒が寒中水責めに合い壮烈な殉教をとげた。信仰のために生命を捧げてキリストの証人となつた殉教者たちを偲び、その模範に倣うことによつて、私たちも現代における証人となる恵みが与えられることを願いながら、殉教録の朗読に耳を傾け、河原に向かつて黙祷を捧げ、各教会の代表から共同祈願、献花が捧げられた。式の中でシャルル・エメ・ボルデュック神父から殉教の意味、時代背景が説明された後「信仰の立場から見れば殉教者は全人類の救世主になつた。殉教を受けた人は信仰の目となり、その心は現在の私たち信者に引き継がれている。私たちは仙台市民一〇〇万人の人々によい知らせを宣べ伝え、キリスト者として証する使命を持つている。」とのメッセージがあつた。

この日は、暖かな日差しでしたが、時折広瀬川から吹き付け

(一本杉教会 久ヶ澤)

## 聖香油ミサに参加して

三月二十七日午後一時三〇分から、仙台元寺小路教会大聖堂で、溝部司教様の司式による聖香油ミサ、併せて、助祭叙階式、助祭・司祭候補者認定式が行われた。

ミサは仙台教区司祭約五十名、信徒は仙台の各教会、修道院、遠く会津若松教会などからの参加もあり、大聖堂の一、二階席がほぼ埋め尽くされた。当日は溝部司教様の叙階式に次ぐ盛大なミサとなつた。

ミサの中で司教様から、教皇様のメッセージが伝えられる。「・・・主の教えをよく黙想し、信じたことを教え、教えたことを実行するように心掛けなさい・・・」。このお言葉が印象的だった。共に、司祭のために祈りがささげられた。

続いて、助祭・司祭候補者認定式が行われた。候補者は神学生坂本耕太郎氏(青森・八戸塩

町教会出身)と舟山亨氏(福島・松木町教会出身)。両氏は「神と人への奉仕と献身」を公に表された。「・・・教会は喜びをもつて受け入れます」との司教様のお言葉を賜り、認定される。「兄弟たちが主に固く結ばれ、キリストの証人となりますよう」共に祈り、祝福された。

引き続き助祭叙階式へ。メキシコ出身の神学生セルヒオ・エルナンデス・カレラ氏(グアダルペ宣教会)が呼ばれる。カレラ氏はこれまでのご活躍が認められ助祭叙階された。大きな拍手で祝福を受けられた。式の中の司教様の訓話、問い掛けは「自分自身への呼びかけ」と受け止める。式後、信徒ホールで茶話会。喜びを共に分かち合う。メキシコから駆けつけられたカレラ師のお母さんの姿も見られた。

帰路、司教様のお言葉が浮かぶ。「・・・貧しい人、苦しい人、助けを必要とするすべての人に主の名によつて神の慈しみを示しますか・・・」。洗礼式を思い起こし、沈丁花の香る街を帰った。(東仙台教会・佐々木)

▼青森 本町教会

写真は、雪に埋もれた新年会の餅つきの一コマです。大賑わいでした。

「復活祭の早い年は春も早い」と言われますが、確かに山のように教会を覆っていた雪も、いつの間にかその姿が消えてしまいました。

今年の復活祭は、新しい仲間（元、篠田教会の方々）四・五十名が増えますので、二〇〇名を越える力強い復活祭になりそうです。ただ、昨年着任したばかりの主任司祭ラフォルト神父様が、体調が思わしくなく、間もなく本国カナダに帰国されるのが残念です。

本町小教会には、松ヶ丘巡回教会をはじめ、藤聖母園が経営



するたくさんの施設や幼稚園、保育園などがあつて、それぞれがキリスト様の思いを第一にして、懸命に働かれております。

本町小教会は、本場に神様の恵みと祝福の豊かな小教会だと思つていきます。  
(新松)

▼岩手 水沢教会

水沢教会は、一九五〇年ベトレム外国宣教会によつて誕生、昨年五〇周年記念式典を行いました。

水沢教会は「後藤寿庵」の教会として知られています。

後藤寿庵は伊達正宗の家臣として福原（現在の水沢市、胆沢町の一部）を治めたキリシタン領主であり、当時の宣教師からアラビアの砂漠の様・と言われたほど、荒れて水不足に苦しめられていた胆沢平野の開拓に尽力しました。

彼が開いた水路は後に「寿庵堰」と名づけられ現在も大切な水路として利用されています。寿庵はカトリック信者からだけではなく、地元の人々からも尊敬され、親しみを込めて「寿庵様」「寿庵先生」と呼ばれています。

毎年、五月の最終日曜日（今年は五月二六日）に教会主催で



「後藤寿庵大祈願祭」を行います。これには地元の人々や市の関係者も多く参加し、地域に根付いた催しとなっています。

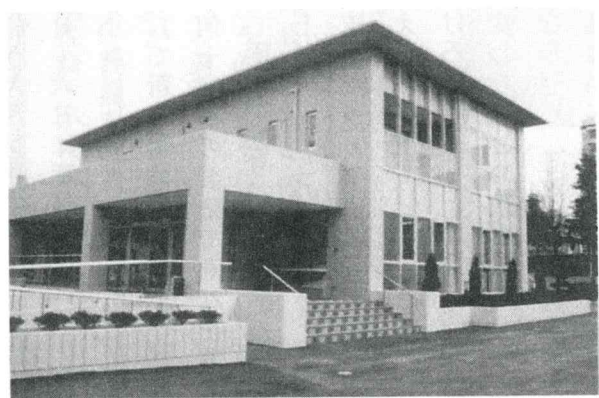
没後四〇〇年経ても神と貧しい民に仕えた後藤寿庵の陰で宣教に励むことができず。また、宣教師たちが始められた寿庵祭を続けていくことが何より感謝の表現であるし、宣教にとつて大切なことであると考えています。

たくさんの方が寿庵祭に来られるのを待ち望んでいます。  
(千田)

▼宮城 北仙台教会

わたしたち信徒の十年來の『夢』だった、新信徒館が皆様の支えと祈りによつて二〇〇二年二月に完成を迎えることができました。

「信仰を通して心のふれあうことのできる教会」「誰でもが自由に参加し活動できる教会」「地域・社会に貢献できる教会」をどのよう活用に活用していくの



か、わたしたち一人ひとりが真剣に考え話し合いながら、キリスト者としての使命である、福音宣教の「場」となり得るよう努力し確認しているところですよ。

例年がない、信徒・未信者の垣根を越えた大勢による「主の復活の喜びの分かち合い」、初めの試みでしたが信徒全員による「ブロック集会」。改めて「開かれた教会」の意義を思い起こす機会が得られたことは、テーマの目的に一步前進できたことと思えます。

わたしたちは、この「場」をとおして『新生北仙台教会づくり』ができるよう邁進しております。  
(江刺)

▼福島 喜多方教会

喜多方教会は、会津地区の神父様、シスターの皆様、信徒の皆様のお助けを得て、教会活動をおこなっております。今年に入り、二つのすばらしいお恵みをもたらしました。

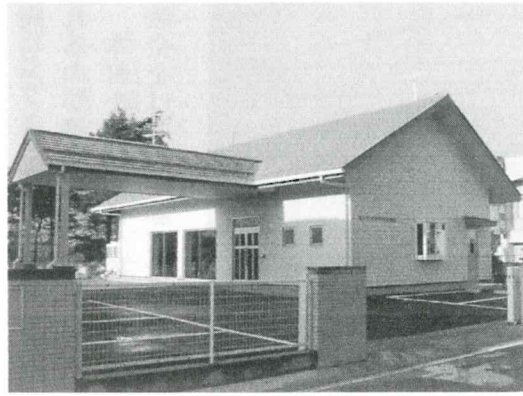
一月十三日に溝部司教様の訪問があり、信徒一同大きな喜びでした。信徒数が少ないこともあり、盛大な歓迎はできませんでしたが、ありのままの喜多方教会を見ていただいたと思えます。また、喜多方の地が司教様のご家族ともご関係があったことを聞き、たいへん驚きました。

また、三月三十日の復活の聖なる徹夜祭に、洗礼式がおこなわれました。喜多方教会で成人の洗礼式がおこなわれるのは、約九年ぶりです。洗礼式のお祝いと復活祭のお祝いを一緒にできたすばらしい復活の主目でした。

小さな教会ですが、聖堂の大壁画を見に来てください。イエス様が両手を広げて迎えてくれます。  
(山田)

### 八木山教会竣工祝別ミサ

三月二四日枝の主日に、八木山教会竣工祝別ミサが、溝部脩司教とフェデリコ神父ほか四



名の司祭の共同司式で行われた。一時から建物の外で、水の祝別、建物の祝別、枝の祝別が行われ、「しゅろの葉」を歌いながら、約一二〇名の人々が入堂した。

聖堂正面の十字架像は、旧元寺小路教会聖堂にあったもので、祭壇は旧石巻教会聖堂で使用していたもの、説教台や洗礼台は旧篠田教会からのものである。また、マリア像は下井草教会から寄贈され、オルガンは、オルガニスト佐々木しのぶ氏の好意により半永久的に借用

### 私の気分転換

神学生 木村 国基

十五年前ぐらいから、毎年通い続けている浜辺があります。大きな海水浴場のとなりにあるその浜辺は、いつも静かで波もおだやかです。一五年前は自転車で、一〇年前からは自動車で、毎年必ず何度かはおとずれています。その浜辺で何をするでもなく、缶コーヒーを飲みながら

の衣服。ボートと水平線を見つめているのが、何よりの気分転換です。一五年前も、そして今も、波は変わらず静かに打ち寄せては引いて行きます。私は年を重ねてきた。変わるものと変わらないもの。時の流れの中で、今の私を確かめるために、今年も波打ち際を歩きに行こう。



することになった。早坂貞彦・榎戸悦両氏合作のステンドグラスも寄贈されたもので、八木山教会の守護者の「聖霊」を表す鳩がデザインされている。遠く綾部教会や旧篠田教会からの参列者もあり、様々な人々の物心両面からの援助や協力によつて竣工なった事を深く感謝するとともに、今後の共同体の霊的社会的発展を祈った。

ミサ後、幼稚園ホールを借りて祝賀会(出席者約一五〇名)が開かれ、教会関係、町内会、工事関係等の人々のスピーチや、土曜学校と青年部、有志による余興などがあり、和やかな内に閉会した。しかしこれで終わりではなく、建物を足場として、今度は本

当の意味での教会建設が始まる。四月からは仙台中央地区に編入されて共同司牧となり、教区には再編と

いう大きな課題がある。昨年一月十六日に焼け出されてから、小教区に安住せず教区に協力して新生を目指す事を決心し、何十回もの会議でそれを表明

し困難を乗り越え、建物が出来上がった。この日の福音にある、枝を持ってキリストを喜び迎えた人々が、今度は十字架にかけると叫びたてる、そういう心変わりがこの教会にあつてはならない。工事担当者銭高組大星篤郎氏の、「私たちは建物を建てました。その建物をどう生かすかは、皆さん方にかかっています。」というスピーチの言葉が印象深い。(竹内淑子)



### 修道院紹介

コングレガシオン・ド・ノートルダム 花園町修道院

花園町にあるから花園町修道院なのですが、もともとここは霞内という地名でした。戦後、修道院の庭に花木や草花がたくさんあつたことから町名変更の際、「花園町」になりました。一九三二年にカナダから五名の修道女が福島に来日したことから日本におけるコングレガシオン・ド・ノートルダムの歴史が始まります。

創立者、聖マルグリット・ブルジョワは、聖母マリアがエリザベトを訪問して奉仕した「ご訪問の精神」に倣いたいと望みました。ですから、コングレガシオンの娘たちは、今も創立者の精神を生き、必要な所にはどこにでも出かけ宣教します。福島に派遣され、今年で七〇周年を迎えます。現在二八名のシスターたちが信仰共同体を作り、幼稚園から短大までの若者約一八〇〇名の学校教育や信仰教育に積極的に関わり続けています。